

ヘルシンキ工科大学への留学をとおして 石井 敏（建築学科長澤研究室）

私がここヘルシンキ工科大学に留学してきたのは今から15カ月前になります。ヘルシンキ・バンター空港に降り立ったのは8月21日、ここ何年かで最も暖かいといわれた夏の残暑が私を出迎えてくれました。「かなり涼しいぞ...」と周囲からさんざんおどされて来たために、やや拍子抜けはしたものの、湿気がなく非常に快適な気候は私のフィンランドの第一印象として悪くはありませんでした。夜9時でも外で本が読めるほどの明るさ、目の前一面に広がる青い空と海、森の中を駆け抜ける野ウサギ、白樺の林に降り注ぐ太陽の光・・・素晴らしいところに自分が来たものだ、と思ったものです。

来て直後、あるフィンランドの方に「日が長くて、いい夏ですね...」といったところ、「これでもかなり日は短くなってね...もうすぐ夏は終わるんだよ...」と少し寂しそうにおっしゃっていたのが妙に心に残りました。ここにこめられる気持ちはようやく1年たって身にしみて分かるようになるのですが...

さて、この留学がどのようにして実現したか、大学での生活がどのようなものなのかを少しご紹介したいと思います。半分は留学の手引きとして、半分はただの読み物として読んでいただければと思います。

「留学の決意」

留学を決意したのは博士課程1年が終わる春でした。それまではいつかチャンスがあったら是非留学をしてみたいなあ...という程度にしか思っていませんでした。今になって思えば、このように思っているばかりでは何も起こるはずもなく、おそらく自分でも留学をしてみたいという夢を見ていただけなのかもしれません。

その夢が現実のものとして動き出したのは本当にちょっとしたことでした。ある日、研究室の助手の方といつものように飲みに行き、いろいろな話をする中で、「今」動かなければもう一生留学なんてできないぞ、もちろん就職してからでも海外に行くチャンスはあるだろう、でもじっくりと研究をすることは出来ない...「今」しかないぞ!...この言葉が私を動かしました。そして、飲んだ勢いもあり「じゃあ明日先生（教授）に行行って相談してみます...」と口走ったのが全ての始まりでした。ひょんなことから背中の中のツボを一押しされて動き出した、とでも言えましょうか。

「思うこと」と「実行すること」の大きな違いを身にしみて感じた、私にとっては人生の中でも最も大きな出来事だったともいえます。

「留学の準備」

私の専攻は建築学です。その中でも高齢者のためのさまざまな環境を考えていくという建築計画学、環境行動学という分野になります。さっそく留学をするために「何か」が動き出したのですが、最大の問題はどこに留学するか...ということでした。もともと北欧における福祉のシステム、高齢者のケア・環境のあり方には世界的に定評があり、留学するなら北欧がいいかな、と何となく思っていました。その道の「王道」で行けばおそらくスウェーデンだったのでしょ。確かにこれまで多くの方々がスウェーデンには留学され、非常に大きな成果がわが国にはもたらされていました。ストックホルム王立大学と本学とは留学の協定もあり、一時はそこに行く心づもりで準備もしていました。

しかし、これまで多くの方が歩んできた同じ道に行くよりも、未知の土地を探ってゆく方が価値があるのではないかと、思いはじめるようになりました。幸い研究室の指導教授と、ヘルシンキ工科大学建築学科の教授が知り合いであるということで、その教授に受け入れを依頼し、ヘルシンキ

工科大への留学を進めることになりました。そうこうしているうちに、なんと本学とヘルシンキ工科大学が留学の協定を結ぶというではありませんか。これはもう、自分にとっても気持ちの上でも大きな後押しとなり、実際にも非常に留学がしやすくなりました。

ヘルシンキ工科大学の留学担当の方とファックス、Eメールを交わすこと何十回に及んだでしょう。非常に細かい所まで親身になって相談に乗って下さり、手配をして下さいました。願書も無事受け付けられ、入学が認められたのは「決意」してからほぼ1年後の4月でした。そして留学が実現したのはその夏8月。実に留学に動き出してから1年半後、博士3年生の夏でした。

「ヘルシンキ工科大学建築学科」

私が建築学科というやや特殊な学科におり、さらにその中でも珍しいpostgraduate（大学院：修士号を持つものが入るコース）にいるために一般的な話にはならないとは思いますが、参考までに状況をお話いたします。

ヘルシンキ工科大学は学生数1万人を擁する大きな大学です。この大学の出身で、現在のキャンパスを計画・設計した世界的な建築家、アルヴァール・アアルトは、建築学科の外装壁だけに特別に、白い大理石を用いることによって、大学の中での当学科の重要性を表現しましたが、現在でも建築学科は大学の中心的な役割を果たしているといえます。

フィンランドの大学では卒業までの規定年数というものが定められておりません。規定の単位を取得した時点で修了ということになります。学士がなく、最低の学位が修士であるため多くの学科では5-7年かけて修了し「修士」を得るということになります。建築学科は卒業までの年数がさらに長く7-10年かけて修了していくようです。その教育の中心はなんといってもデザイン教育であり、日本の大学のようにさまざまな分野の幅広い学習をしていき、研究的な活動も行われる（場合によってはデザイン教育よりも研究教育が上回る）という状況と全く異なります。建築学部とでもいうべき独立した存在になっており、いわゆる日本でいうエンジニアリングの分野には属しておりません。とにかく入学したときから建築のデザインのための教育だけが行われ「建築家」を養成していく場が建築学科であります。つまり、学科内では研究活動というものはほとんど行われず、研究室という組織・単位もありません。教授陣は皆「Doctor」ではなく「Architect」です。それぞれが自分の事務所を構え、週に1-2日講義に来るというスタイルで、日本の建築教育とはずいぶん様子が異なります。

したがって、研究を主目的に大学院に入学した私は、自力で研究を進めて行かなくてはなりません。必要があれば教授とコンタクトを取りディスカッションをしながら進めていきます。

建築学科には欧米を中心に多くの留学生が集まっています。常時30人以上の留学生が在籍しています。そのほとんどがEU内での留学プログラムによる単位交換制度にもとづくもので、半年~1年で自国に戻ったり、新たな留学先を行ったりします。われわれ日本の学生にとっては留学というのはある意味で一大決心であり、それなりの準備が必要で大きな出来事ではありますが、こちらの学生たちにとってはかなり気軽にあちらこちらへと学生時代に留学をしているようです。

大学での講義はフィンランド語が主体ですが、留学生用にかかなりの英語の講義も用意されています。大学はもちろん、ヘルシンキなどであればほとんど英語が通用し生活には困ることはありません。（個人的に）イギリス、アメリカ、フランス、スペイン人などの喋る英語はかなり聞き取りが難しく「癖」を感じてしまうのですが、フィンランド語の発音が比較的日本語のそれと似通っているためか、フィンランド人の英語はわれわれ日本人の耳にもなじみやすいものです。

「学生生活」

フィンランド国内の大学は全て国立大学で授業料は無料です。年間約1万円を学生団体に支払うだ

けで学生証が発行され、その学生証が生活をしていく上で大きな「力」を発揮します。キャンパス内の食堂での食事は学生料金（350円前後）で食べられるほか、非常に安く医療を受けることが出来ます。国内の航空、鉄道料金は全て50%割引、またヘルシンキでの生活で最も重要な足となるバス・トラムのチケット、定期券も30%～40%の割引で購入することが出来ます。さまざまなコンサート、オペラなども50%の割引でチケットが購入できます。市内に点在する学生フラットにも入ることが可能です。

このように非常に多くの「恩恵」を学生は受けることが出来るわけですが、あくまでもこれらは「学生」にのみへの適用であって、私のような「大学院生」には全くと言っていいほど適用されません。大学院生は、学籍番号は与えられますが、学生証は与えられず不思議な立場となります。そもそも、こちらでは日本のような博士コースにのみ在籍し研究活動だけを行う、いわゆる「学生」というのはほとんどいないようで、仕事を持ちながらその一方で論文を書いている人や、アシスタントを行いながら論文を書いている人などがほとんどであり、社会的な立場としては「一般社会人」として扱われます。そのために学生としての特典は得られません。個人的にはさまざまな面で納得できない...というか、理不尽だ...と感ずることも生活の中でしばしばありますが、こればかりはどうにもならないようです。

大学の新学期は9月の1～2週目に始まります。秋学期は翌年の1月末まで続きます。クリスマスをはさんでの3～4日の休日、元旦を除いてはほぼ通常通りの講義が行われます。感覚的にはクリスマスが日本でいう正月のようなもので、それがあけると「年も明けた...」と感ずるような街や人々の様子です。春学期は2月から5月半ばまでですが、途中4月にイースター休みを1週間はさみます。そしてまちに待った夏休みが来るわけです。まるまる3カ月以上休みがあることとなります。学生は夏にそれぞれ研修という形で仕事をしたりします。日本では1年は12カ月と感ずっていたし、体感もしていましたが、こちらに来てからは1年は9カ月しかない、と感ずて、いろいろ取り組まないで社会全体のペースについていけないことが分かりました。私は研究の性格上、さまざまなところでいて人に話を聞いたり調査を行ったりするわけですが、夏の3カ月間はほとんど全てと感ずてもよいほど社会は「夏シフト」で動いており、思い通りにことを運ぶことができません。

結局こちらも社会にあわせて「休業」しなくてはならなくなり（というよりも、あの素晴らしい夏の間は仕事を感ずる気がなくなる....）、やはり夏までの9ヶ月間に精一杯がんばらなくてはならなくなります。

「自然」

イメージ通りはやり寒さは厳しい国です。ヘルシンキなど南側の地域はバルト海の影響もありこの緯度にしては温暖です。しかし、1年を通して月の平均気温が20度超す月はありません。もちろん暖かい夏には30度近くになる日もありますが非常に希です。湿気が非常に少なく、非常に低い位置から照るつける太陽は「暑さ」というよりも「熱さ」を感ず、体感的にはかなり暖かくなります。冬、特に1～2月はかなり冷え込みます。日中でもマイナス10-15度という日が続き、ヘルシンキあたりでもマイナス20～25度程度は記録します。1月から4月の末までは周りの海や湖全てが凍り付きます。凍り付く海の上を散歩したり、クロスカントリースキーをやったりする光景は最初はかなり「衝撃的」でしたが、いつのまにか自分もこのような一員になっていました。

寒さ以上に精神的に堪えるのが冬場の暗さです。夏が終わると一気に秋が近づきます。10月に入るといつのまにか冬の気配を感ずるようになり、夜間はマイナスに突入します。いよいよ冬が来たか...と感傷にも浸ってしまいます。夜中でも明るかった夏至から半年たつと、朝は10時頃にならないとぼんやりと明るくならず、午後3時には暗くなるというように、その世界は一転します。太陽・光の大切さを身にしみて感ず、とにかく冬が終わり、夏が来るのをひたすら祈り、待つようになります。寒さの中にある自然は美しく、薄暗い中で点るロウソクの美しさなど、それはそれで大変味わい深いものがあります。しかし...やはり、あの暗さだけは精神的に堪えます。生まれてから毎年この冬とつき合っているフィンランド人でさえ、冬の暗さはかなり精神的に堪えるようです。日光が体に当たらないことから来るさまざまな生理・医学的な問題も生じます。フィンランドの夏と冬

を知っている人々は、その夏と冬とでの人々の様子の違い、街の雰囲気の違いをすぐに感じます。まるで別の国に来たかのような印象を得ます。

しかし、自然というのはうまくできているものです。このような厳しい冬を与えられるかわりに、それを帳消しにするほどの素晴らしい夏をも与えられます。だからフィンランド人は皆、黙々と冬の時期に働き、夏の休みのために、まさにそのためだけに...必死で頑張っているという印象を持ちます。確かに、1年を過ごしてみて、そのフィンランド人の気持ちがよく分かるようになりました。夏が終わる寂しさ、冬を迎えるある種の絶望感、それを乗り越えたときに来る夏...最初に紹介したフィンランド人の言葉がようやく見にしみてわかってきました。

これ程まで自然を意識し、身近に感じ、生活した経験は日本ではありません。何につけても非常に自然と近い距離をとりながら生活しているといえます。

「生活と国民性」

物価は日本と比べて安くはありません。物によっては日本以上に物価の高さを感じます。スーパーなどで買う野菜や乳製品などはかなり安く感じますが、「製品」になると一気に高くなります。20%以上かかる消費税が含まれていることを考えると、そんなものなのかとも思いますが、やはり割高感は否めません。日本のように気軽に安く食べることが出来る食堂などもなく、結果的に毎日の料理は必修となり、その腕は磨かれます。

住居費は学生用のフラットに入れば2万円～3.5万円（通常2～3人でキッチン、シャワー等を共有する形態）、プライベートなワンルームのフラットを借りるとヘルシンキ市内で5万円～7万円といったところでしょうか。

あらゆる面で簡素で清潔な生活スタイルは、日本のようなサービス過剰で、多くの刺激があるような国から来るとかなり戸惑いを感じますが、それも慣れると心地よいものになります。

私は幸いにもフィンランド政府の奨学金（月約10万円）をいただいておりますが、生活にはやはり12万円程度はかかっているのではないのでしょうか。

スウェーデン、ロシアという大国には生まれ、歴史的にも辛い経験をしてきたフィンランド、その中で自国のアイデンティティを失うことなくここまで来た、わずか500万人の国民は、非常に素朴で物静かというのが率直な印象です。しばしばフィンランドの国民性を一言であらわす単語としてフィンランド語の「sisu: シス」が用いられます。これは忍耐とでも訳しましょうか。まさに耐えて忍んで、内に秘めた闘志で生き抜いてきた様子をあらわしています。

非常に保守的ではあるが、都会化されない素朴さの中にある優しさ、親しみやすさは日常生活を送っていく上で大きな力になります。夜中、街の中を女性一人でも歩けるほど治安は安全で、今や日本などよりもかなり安全な国といえるでしょう。

あるフィンランドの解説書によると、フィンランド人の作家・トペリウスが著した本「19世紀のフィンランド」（1898）には、以下のような文があるそうです。

「フィンランド人は一般的に快活で、芯が強く、粘り強くて、意志も強い...古くてよく知られているものを好み、新しいものを好まない...やるべきことはしっかりやり、方を尊重し、自由を求め、正直である...フィンランド人は控えめで、慎重なことで知られている。人とはなかなか打ち解けないが、いったん打ち解けると、信頼できる友達になる...。」

私を感じるフィンランド人像そのものであり、100年を経たいまでも全くかわらないフィンランド・フィンランド人があるといえます。

なにやら、留学記というよりはフィンランド記になってしまいましたが、やはり留学というものはそのようなものでしょう。自分の研究を進めることはもちろんですが、全ての土台になることはその国を知ることです。そしてその国を愛するということでしょう。留学を通して得られることははかりしれません。私の体験は、フィンランドへの留学を通してのものですが、どこの国に行ってもそれは共通しているでしょう。

私はかろうじて大学生生活最後の博士3年という時期に滑り込む形で留学が実現したわけですが、もう少し早ければ...という後悔がないわけでもありません。しかし、一方で私にとってはもっともいい時期に留学できたのかもしれないと思う点も多くあります。自分自身で決意し、動き出したときがもっともその人に適した時期であり、もっとも意味がある留学になるのかと思います。なにかから、どのような形でそのきっかけを得るのかはそれぞれ違うでしょうが、そのチャンスを逃さないことが大切です。

ここまで書いてきて、何か自分一人の決意、力でここまで来たように思われるかもしれませんが、決してそうではありません。本当に非常に多くの方々の助け、ご協力を得てここまで来ました。留学を実現した今でさえ、多くの方々に支えられてやっていると感じます。

幸い東大には、多くの海外の大学との留学提携がもたれており、学生にとってそのチャンスはとて大きく広がっています。今後一層多くの学生がこのチャンスを利用し、それぞれの道で留学を実現していくことが出来ればと節に願っています。